

2022 年のテーマ： 今、愛を生き「いのち」をつなぐールカ福音書に学ぶ
第 5 回 救いの時、恵みの時を知る

＋パウロ大塚喜直

【はじめに】2022 年のテーマ：今、愛を生き、「いのち」をつなぐ

- 1) 「今」→ 『コロナ時代を生きる信仰』を求める。ルカとともに。
- 2) 「愛を生きる」→ ルカの救済観、「普遍的救い」の時、「恵み」の時を知る。
- 3) 「いのちをつなぐ」→ 現代人が喪失している「交わりのいのち」を回復する。
いのちを「明日」へとつなぐ。「明日」とは、解放され、ゆるされた後の新しい生き方へ。

参照：「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」（Ⅱコリント書 6・1-2）

わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みは無駄にしてはいけません。なぜなら、『恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた』と神は言っておられるからです。

1. ルカの福音書執筆の目的

- (ア) ルカ福音書の執筆時期は、AD70-80 年代の間と思われる。
- (イ) そのころのキリスト教会は、ほぼ異邦人の教会になっていた。キリスト者共同体がユダヤ人のみであった時から、大多数が異邦人となった時代へ流れとその変化に伴う問題に、ルカは気付いていた。第二世代を迎えた初期のキリスト者の共同体内部では、新しい回心者の情熱や献身的姿勢は失われ、かつ、外部からは、ユダヤ人と異教徒の両方からの敵意と反対を受けていた。初期キリスト者のアイデンティティの危機を熟知していた。
- (ウ) ルカは福音書と使徒言行録を、ローマの高官テオフィロ（神に愛された）に宛てて書いているが、執筆の目的はローマ帝国の各地から集まっているギリシャ語を話すユダヤ人、異邦人社会から救われた人々を励ますことにあったと思われる。
- (エ) ルカという人物はシリアのアンティオキア出身。パウロの協力者でその伝道旅行にも従った医師。新約諸文書の著者の中で唯一、当時のヘレニズム世界での正規教育を受けた。ルカのギリシャ語は極めて美しいもので、語彙も豊かである。
- (オ) ルカは、キリストによってもたらされた救いが、ユダヤ人のみならず、異邦人を含む全人類に及ぶものであるという「普遍的救い」を異邦人キリスト者に向けて主張した。

2. ルカの福音書の中心的テーマ：「失われた人」の解放「アフエシス」

- ・ ルカ福音書の主題は人間性を喪失しているものを解放して、本来の人間性を回復させ、未来（明日）を開かれるキリストが来られたことを告げ知らせることである。
 - 「解放」、「自由」はギリシャ語では、ともに「アフエシス」である。
- ・ ルカ 4・18-19 は、イエスの公生涯全体の序文、福音書の物語全体の要約。
- ・ ルカ 9・10（ザアカイ）「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」
- ・ イエスの活動を貫くのは「あわれみ」（ギリシャ語 エレオス）
（ルカ 1 章～2 章に多用：1・50, 1・54, 1・58, 1・72, 1・78）
「あわれに思う」＝きみがよじれる。ギリシャ語は、「スプランクニゼスタイ」という動詞。
「はらわた」を意味する「スプランクナ」という名詞を動詞化した言葉。
目の前の人の痛みを見てはらわたがゆさぶられる、自分も同じ痛みを感じる。深い共感。

3. イエスが探し求めた「失われた人」

- ・イエスは、当時の社会における様々なバリア(障壁)を取り除き、人間として最も必要な「交わりのいのち」を喪失している人々を探しもとめた。
- ・当時のバリア
 - ① イエスは指導者(祭司、パリサイ人、律法学者)と、「地の民」または「律法を知らない群衆」アム・ハーレッツ(羊飼いたちなど)との「階級的」バリア
 - ② 富める者と貧しい者との「経済的」バリア
 - ③ ユダヤ人とサマリヤ人(異邦人、特にサマリヤ人に対するユダヤ人の憎悪は強かった)「人種的・宗教的」バリア
 - ④ エルサレムとガリラヤといった「地域的」バリア
- ・イエスは、貧しい人々、取税人、サマリヤ人、女性など、無視されていた人々と関係をもつことで、当時のバリアを越えて、神のあわれみを実践的に証しした。
- ・「**貧しい人々**」＝本来、豊かな者であったものが貧しくなっている。本来価値あるものが、価値あるものだと思っていない。そして だれからも愛されないと思っている。
- ・「**捕らわれている人**」＝自由の身だと思っていたが、実は囚人であり捕らわれの身となっている。何もかも持っていると思っているが、実は大切なものは何ももっていない。
- ・「**目の見えない人**」＝自分は見えていると思っているが、実は盲目であり霊的な現実が見えないでいる。
- ・「**圧迫されている人々**」＝本来自由であるべきものがしいたげられ抑圧されている。
- ・ルカは、個人のかけがえのなさをルカは強調している。「ひとりひとり」「ひとり息子」「ひとり娘」「ひとりの罪人」といった独自の表現がみられる。

4. まとめ：開かれた明日(未来)の無限の可能性

- ・ルカは、キリスト者を励ますために、福音書を書いた。
- ・ルカは、神の救済的象徴として、「食卓」(祝宴)を描いた。
ルカの独自の記事として、7・36～50, 14・1～14, 15・1～2 を参照。
- ・「食事」は、いやしや罪の赦しと結び合わされ、救済的一連の「食事」は、最後の晩餐とそこでの「新しい契約」(22・20)で完結する。
- ・イエスの受難、死、復活、昇天を通して締結されるこの「新しい契約」は、神のイスラエルのみならず、人類全体との和解を実現し、「食事」の意味、つまり神の交わりを完成する。
- ・主の食卓(祝宴)にあずかることが、神のあわれみによる救いといえる。
- ・ザアカイのように、イエスは人間が罪を悔い改めて新しい人間になるためには、まず赦しの宣言がなされた。それを受けて、今までは人をだましてきたザアカイは、その後は人に与えていくという転換が起こった。人々に「与えていく」、新しい人生が始まった。
- ・イエス・キリストによって受け入れられ赦されるときに、新しい人間に変えられるのである。
- ・「明日」が違ってくる。「明日」とは赦された後の生涯である。明日は開かれたものとなる。人間らしい人間、喜びを味わうことのできる人間、人々から何かを与えられていくような人生である。ルカの福音書には開かれた明日(未来)の無限の可能性を見ることができる。
- ・「あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたもあわれみ深くしなさい」(ルカ6・36)。御父の心をもって、様々なバリアを取り払い、人を(敵さえも)愛し、善を行ない、祝福し、祈り、与え、貸し、赦していくことによって、新しい明日を生きていく。
- ・神と人との開かれた新しい関係を築くこと、これが、ルカが強調するイエスの救い。

以上。